

幻冬舎plus編集長

ゆうこ

竹村優子さん

CROSS TALK

中逸博光 町長

長洲町出身で、現在、出版社(株)幻冬舎が運営するWebサイト「幻冬舎plus」で編集長として活躍中の竹村優子さん。

今回、出版業界の第一線で活躍されている竹村さんと中逸町長が長洲町の魅力やまちづくりについて対談を行いました。

ながら、そういう場所づくりに心がけています。それは自宅も一緒ですね。

長洲町はやっぱり「金魚」

町長 竹村さんにとって長洲町はどのようなイメージをお持ちですか。
竹村 長洲町といえば、やはり「金魚」というイメージですね。

町長 私も長洲町といえば「金魚」だと思っています。昔は80を超える金魚養殖業が営われていましたが、今では、十数件のみとなっています。町では、もう一度金魚養殖業の復活を目指して、東京や愛知県瀬戸市などで長洲町の金魚をPRしています。また、今、東京では金魚をどんぶりで飼うことが流行っています。そこで、どんぶりを愛知県瀬戸市と連携して試作品を製作するなど、長洲町だけではなく、さまざま

な自治体や企業と連携しながら取り組みを進めています。

竹村 金魚は本当に幻想的で、ロマンチックです。これからもその取り組みを進めていけば、長洲町のPRにもつながると思います。

町長 金魚が盛んになったのは、町中に良質のミジンコが大量にあったからだといわれています。その点を踏まえ、町オリジナルのミジンコの栽培実験にも取り組んでいます。町だけではなかなか難しいと思うので、人と人とのつながりによって、さまざまな取り組みを進めることができていると感じています。協力いただいている皆さんに本当に感謝しています。

何歳からでも夢中になれる

町長 長洲町でも高齢化が進んでい

町長 はじめまして。長洲町長の中逸と申します。本日はよろしくお願います。

竹村 こちらこそ、よろしく願います。

本好きがきっかけで出版業界へ

町長 竹村さんは昔から出版業界に興味があったのでしょうか。

竹村 小さいときから、本を読むことが大好きでした。本を読むことが一番面白かったです。何かを知ることでできて、読んでいてドキドキワクワクしました。それが一番の楽しみでした。当時は、近所に本屋がなかったもので、いつも図書館に通っていたことを覚えています。本を読むこと以外でも、運動することが好きで、部活では水泳や陸上をしていました。好きが高じて「箱根駅伝」という新書をつくったこともあります。

町長 箱根駅伝といえば、私たちの母校である玉名高校の大先輩のマラソンの父・金栗四三先生が生みの親なことでも有名ですよ。

今、町ではポートピア長洲の益金の一部を活用して、各小中学校の図書館に本を購入して新刊の充実を図っています。本を読んで好きになってくれる子どもたちがたくさん増えてくれればうれしいですね。

竹村 子どものときから本を読む習慣をつけることは、他者への想像力を養う意味でも大事なことでと思います。大人になってから習慣にするのはなかなか難しいです。

ます。私は元気な高齢者が増えることが町の活力につながると考え、平成22年から「介護予防拠点施設」として公民館を改修し、これまで健康体操や脳トレを実施してきました。そして、これから介護予防拠点施設で特に力を入れていきたいのが「木育事業」です。町では木育を通じて木の大切さや環境を守ることを熊本大学と一緒に広めてきました。今年度は、木育を介護予防拠点施設で高齢者に教えています。皆さんのイキイキしながら一生懸命ものづくりに取り組み姿を見て、こちらも元気をもらっています。

竹村 何かを一緒に懸命取り組むことには、年齢は関係ないと私も思います。私が手がけた本の中では、86歳でブログをやっている人もいます。もう本当に若くて、年齢を理由にするのは言い訳だと教えられました。

多くの人に魅力を伝えるために

町長 多くの人に本やサイトの魅力を伝えるためにどのようなことに心がけておられますか。

竹村 サイトを見る人が楽しんでもらうことを一番に心がけています。そのためには、言葉の使い方や写真の見せ方など、いろいろチャレンジしています。そして、どれが一番反応がいいのか、どのくらい閲覧されているのか、常に検証するようにしています。

町長 それはとても大事なことでと思います。今、長洲町もふるさと納

町長 幻冬舎さんが運営している幻冬舎plusをインターネットで見せていただきました。非常に多くの記事がありますね。

竹村 これは読まれる、これは読まれないなど考えずに、おもしろいと思ったものは基本的に掲載しています。その代わり、膨大な情報をどのようにしたら読んでもらえるか、見出しのつくり方などをチェックするようにしています。

町長 本を出版する上で大変な点はありますか。

竹村 作者によっていろんな考え方があるので意見がぶつかることもあります。互いに真剣勝負だからこそできるのかもしれないですね。

町長 ところで、仕事や普段の生活の中でストレス発散はどのようにされていますか。

竹村 本の世界に携わっていてストレスを感じたことはないかもしれませんが。きっと、もともと本が好きだからだと思います。だから仕事と趣味の境目がものすごく曖昧です。思わぬところでアイデアや出会いがあり、それが仕事につながることもあります。これは仕事と思うってしまう方がストレスになってしまうので、あえて曖昧にすることも大事なことではないかと思っています。

町長 竹村さんにとって、今の目標はなんですか。

竹村 目標というよりは、自分のいる場所が嫌な場所にならないように居心地の良さを作っていこうと思

税がとも増えてきています。縁もゆかりもない人が長洲町に納税してくれる、皆さん長洲町を見ていただいているのだなと感じています。

いつまでも変わらなく「ななな」

町長 ふるさとに帰ってくると、どんなことを思い出しますか。

竹村 私は高校卒業してから長洲町を出てしまっているので、帰ってくるといつも子どもに戻った気持ちになって懐かしく感じます。やっぱり、変わらない場所としてふるさとがあるのはいいなあと思います。

町長 定年を迎えたらどのように過ごしたいですか。

竹村 東京にずっと住むかどうかはわかりません。この町も含めて、いろんな場所で新しい経験ができればいいなと思っています。

町長 長洲町はいつでも竹村さんをお待ちしています。本日はどうもありがとうございました。これからの活躍を期待し、ふるさと長洲町から応援しています。



▲これまで竹村さんが手がけた本の数々

幻冬舎plus Webサイト：http://www.gentosha.jp/